

# オーストラリア東部の大学事情

遠 山 嘉 博

## 目 次

- I はじめに
- II シドニー市
  - 1 シドニー大学
  - 2 ジェームズ・ベネット社
  - 3 ニュー・サウス・ウェールズ大学
- III キャンベラ市
  - 1 オーストラリア国立大学
  - 2 その他
- IV ブリスベーン市
  - 1 クイーンズランド大学
  - 2 グリフィス大学
- V ケアンズ市
- VI おわりに

## I はじめに

筆者は、オーストラリア研究所 1989 年度現地調査研究員として、オーストラリア東部の諸大学を訪問し、資料収集、情報収集、関係者との意見交換などを行う機会に恵まれた。実施時期については、筆者の研究活動や大学諸業務との関係上調整に大いに苦労したが、最終的に日程は、1990 年 3 月 17 日の卒業式の翌日 3 月 18 日の出発、次年度の学内行事が始まる 4 月 1 日の前日 3 月 31 日の帰国となった。この 2 週間の短期間に、シドニー、キャンベラ、ブリスベーン、ケアンズの諸都市をまわり、シドニー大学、ニュー・サウス・ウェールズ大学、オーストラリア国立大学、クイーンズランド大学およびグリフィス大学の 5 大学、その他を訪問した。その間、研究上の資料収集や情報収集といった私的な目的に時間を割くとともに、(1)大学で現在行っている学生交換制度、(2)筆者が将来実施を期待している語学研修計画や(3)共同研究計画などについて関係者と意見交換を行い、(4)オーストラリア研究所の図書購入の清算を行うといった公的な目的をも果たさなければならなかった。したがって、それはまことにハードな過密スケジュールとなったが、半面、密度の濃い訪豪でもあった。

筆者の訪豪は1977年を初回とし、その後1981年、1983年、1986年と続き、今回で5度目である。それぞれの訪豪はそれぞれに目的や態様を異にするものであったが、今回もまた、従来とは性格の違ったものであった。以下、訪問の日程に従って回顧、論述していこう。

## II シドニー市

3月18日12時30分大阪国際空港を発ち、18時10分シンガポール着、約3時間の待機の後、21時ちょうど発に乗り、3月19日7時15分にシドニーに到着した。

### 1 シドニー大学

早朝にもかかわらず、シドニー大学文学部東アジア学科 (Department of East Asian Studies, Faculty of Arts) の松井朔子上級講師 (現準教授) の親切な出迎えを受け、シドニー大学に到着、大学業務の開始時刻まで、同氏の研究室で休憩させてもらった。松井氏の事前手配のおかげで、同大学の留学生宿舎であるインターナショナル・ハウスで3泊4日の手続きをとることができた。4日間のシドニー大学滞在中に、学科長のヒュー・クラーク (Hugh D.B. Clarke) 教授をはじめ、オーストラリア詩の専門家であるリース・モートン (Leith D. Morton) 上級講師ほか若干のスタッフと交歓することができた。同学科の研究棟では、オーストラリアの大学にもかかわらず、各研究室や廊下には日本語が飛び交っており、オーストラリア人スタッフとの間でも日本語がスムーズに通用することに一驚を喫した。学科の性質上、当然といえば当然かもしれないが、これはこれまでのオーストラリア諸大学の訪問時には経験しなかったことであり、さすが日本語コースだけのことはあると変な感心をさせられた次第である。

今回の訪豪の4大公的目的の一つであるシドニー大学での語学研修の実態と可能性について、早速松井氏は筆者に説明をし、研修の場であるウィメンズ・カレッジ (Women's College) に案内してくれた。ウィメンズ・カレッジは、松井氏が留学生時代に宿泊された場所であるとのことであったが、古式豊かな立派な建物であった。名称はウィメンズ・カレッジとなっているが、現在では男子学生の宿泊も可能とのことであった。研修生が食事をする食堂で昼食を頂いたが、教授連の食事をする場所はハイ・テーブルといって、中央の一段高いところであることも知った。

松井氏によると、これまでに関西の二つの大学が同カレッジで語学研修を実施したとのことである。実施の具体的方法は、研修時期の相違からそれぞれで異なっているという。甲南女子大学のそれは、12月下旬から1月初旬にかけての2週間で、この期間中ウィメンズ・カレッジに宿泊し、教育学部の先生 (オーストラリア人で、外国人に英語を教えているスタッフ) の指導を受ける。費用は授業料、宿泊料、3食込みの2週間で1,600 オーストラリア・ドル



シドニー大学ウィメンズ・カレッジ入口前にて松井朔子上級講師とともに

といい、15人を1クラスとしている。ウィメンズ・カレッジは、12、1、2の3カ月間、宿泊が可能であるが、半面、夏休暇中のため一般学生との交流はないようである。一方、帝塚山学院大学のプログラムは、8月下旬から9月にかけての5週間で、この期間はウィメンズ・カレッジは学生が滞在していて利用できないため、シドニー都心にあるYWCA（ただし、男子も階を異にして宿泊可）に宿泊し、大学からバスのチケットをもらってウィメンズ・カレッジでの授業に通う方式をとっている。7、8、9月はウィメンズ・カレッジはふさがっているから、そこでの宿泊体験はできないが、半面、一般学生との交流が可能となる。甲南女子大学はすでに2回実施しており、今年3回目を行う予定である。帝塚山学院大学は、今夏の研修が最初であったという。

この語学研修プログラムはすべて、ロバート・ラベル（Robert Lovell）氏のオーガナイズによっている。彼はシドニー大学教育学部の卒業生で、高校教師やシドニー大学チューター経験もあるが、アドミニストレーターの仕事に興味と適性を見だし、今はこの仕事に専念しているのである。自らアラムナイ・トラベル（Alumni Travel）という会社を設立し、教育関係のツアーの計画と実施に当たっている。したがって、シドニー大学の語学研修は彼の仕事の一環としてパート・タイマーでやっているわけであるが、非常に精力的に尽力しているようである。日本とオーストラリア間の研修プログラムのほか、アメリカとの間のそれなども手がけている。日本からのものとしては、上記の2大学のほか、英語学校のものや、

さらにはエルダー・ホステルという年配者向けの日本語によるものや、中学生向けのプログラムなども手がけていると聞いた。日本から送り出された学生は、オーストラリア滞在中はすべて責任をもって預かるという信頼のできる企画のようである。

松井氏より、3月20日の最終時限に、大学院生を対象に日本経済についての講義をするよう依頼された。日本語専攻の学生であるから、日本語でよいとのことであった。松井氏の多くの親切への返礼の意味も兼ねて承諾し、早速コピーを作って講義に備えた。旅行会社で働く社会人学生も含む10人足らずの学生を相手に約1時間ほど、戦後日本経済の高度成長発展過程の足跡、それを可能にした諸要因、高度経済成長の結果として現在日本経済が直面している諸問題などについて講義した。講義後、中国人の女子学生から、長い間日本語の講義を受けてきたが、日本経済についての講義ははじめてであったとして、深い関心と熱心な質問を示され、講義の反応に満足することができた。

筆者にとってシドニー大学は、どちらかというところ、これまで縁の薄い大学であった。前回訪豪の1986年7月19日、ニュー・サウス・ウェールズ大学のT. モジナ氏のすすめで、同大学で開催されたプライバティゼーション・コンファレンスに出席したのが最初の訪問であった。しかしその時は、それ以上学内を散策することもなしに終わった。コンファレンスの会場であった円型のホールは、奇しくも、今回宿舎としたインターナショナル・ハウスの食堂であることがわかった。

シドニー大学はオーストラリア最古の大学であるが、上記以外に縁のなかったのは、経済学者の知人がいないことによるのである。今回、文学部関係の接触を通して同大学の実態に深入りすることができたことは、大きな喜びであり、収穫であった。同じシドニー市内のニュー・サウス・ウェールズ大学には、1977年の最初の訪豪時に、日本人留学生の案内で接触し、また前回の1986年にも、同大学に留学中の名古屋市立大学助教授の星野靖雄氏を通して多くの知己を得たが、同大学の広大なキャンパスと、何の装飾もない機能本位のアメリカ式建築物群が印象的であった。これにひきかえシドニー大学の建物は、それが建てられた時代の建築様式によっているとのことで、教会風のゴシック式の建物も多く、中世風の壮重な雰囲気と歴史の古さを感じさせると同時に、多様な様式の建築物が狭いキャンパスに、一見したところ無秩序にひしめいているという感じを受けた。ニュー・サウス・ウェールズ大学に比しては狭いキャンパスに、大勢の学生があふれており、旺盛な活気が感じられた。政府の学校吸収・合併政策で、音楽学校や看護学校も大学に吸収され、学校数が増えているとのことで、伝統的には18,000人の学生数であったが、今では22,000人を数えるという。しかし、これがオーストラリア最大かどうかは、明確ではないという。学生の風俗は日本同様現代風で飾り気がなく、インターナショナル・ハウスの中はもちろんのこと、キャンパス

1) プライバティゼーション・コンファレンスの内容については、当時の論文で発表した。つぎを参照のこと。遠山嘉博「最近のオーストラリアの社会経済事情」『オーストラリア研究紀要』第12号、1986年12月、192-201ページ。

内の道路でも、秋というのに裸足の学生が散見されたことに驚いた。ただ、松井氏によると、シドニー市の中心部にあるためか、最近盗難も多く、夜間のキャンパス内の一人歩きは慎むようにいわれているとのことであった。これには、安全性という点では日本以上であると思ってきたオーストラリアの裏面をあらためて認識させられた思いを禁じえなかった。

## (2) ジェームズ・ベネット社

第2の公的目的を果たすべく、3月19日の午後、ジェームズ・ベネット (James Bennett) という書籍販売会社を訪問した。オーストラリア研究所は数年前、豪日交流基金を通してオーストラリア関係図書購入の補助金を受けたが、当時同基金在日事務所にいたジョン・マクブライド (John McBride) 氏の依頼により、図書購入は同社を通して行うこととした。注文とともに代金を送ったが、絶版その他の理由で入荷しなかったものも多く、その後清算と返金を手紙や電話で再三依頼したが、担当者が辞めたとか、明日ファックスを送るとかいいながら、長い間なしのつぶてとなっていたので、その清算のために赴くことにしたのである。シドニー市中心部よりはるか北部の海岸沿いのコラロイ通り (Collaroy Street) に、同社はあった。

応対に出てきたマネジング・ディレクターや顧客サービス担当者はいずれも女性であり、その他にも女性従業員の多さが目についた。オーストラリアにおける女性労働者の進出ぶりは、単に数のうえでだけでなく、地位の面でもかなりのものであることを、まず再認識させられた。彼女たちとまず最初に、これまでの入手図書と金額を再確認し合い、つぎに残金の支払いを請求したところ、同社にある在庫の中から書物を選んで買えという、その商売気の旺盛さというか強引なやり方に戸惑ったが、これがオーストラリアのビジネスのやり方かと気を取り直し、研究所として有益と思われる図書を選定した。それでもなお若干の残金が出るので、それを請求したところ、ビジネスであるから現金では渡せないという。しかし、この機会にぜひ清算したいと思ったので、当方も主張した結果、これは小切手でもらい、翌日松井氏の口座を通して現金化し、シドニー大学で書籍を購入してすべて清算することができた。長年の気がかりの案件をやっと解決して安堵するとともに、日本の通常のやり方とは違ったオーストラリアのビジネス慣行 (ジェームズ・ベネットに固有のものかもしれないが) に面くらうとともに、国際的な取引や決済方法の難しさを痛感したことであった。

## (3) ニュー・サウス・ウェールズ大学

1986年の訪豪時にはニュー・サウス・ウェールズ大学に通いつめたが、今回はシドニー大学が中心であったから日程上、ニュー・サウス・ウェールズ大学の訪問は儀礼的なものとならざるをえなかった。旧知の経済学部トム・モジナ (Tom A. Mozina) 氏に連絡をとり、3月21日の夜旧交を温めた。翌3月22日の午後キャンベラへ飛ぶその午前中に大学へ立ち

寄り、経済経営研究所 (Economic and Management Studies Centre) 所長のウィリアム・パーセル (William Purcell) 氏や John Lodewijks 氏らに会い、意見交換や情報収集を行った。

ニュー・サウス・ウェールズ大学はもともとテクニカル・カレッジとして出発し、第2次大戦後単科大学に昇格、さらに、政府の学校合併政策により総合大学に発展したようである。その名称からして、州のバックアップ体制の面では、シドニー大学よりも有利な地位を占めているということである。すでに述べたが、シドニー大学の古典的で荘重な雰囲気とは異なり、シンプルな四角の建物が散在しており、いかにも戦後派の大学といった印象であった。学生数はシドニー大学に劣らず多いというが、キャンパスが広いせいか、シドニー大学ほど混雑した感じではなかった。

### Ⅲ キャンベラ市

キャンベラには当初、2泊3日滞在する予定であった。ところがシドニー滞在中、クイーンズランド大学のティスデル教授に電話連絡したところ、筆者のキャンベラ滞在予定の3日目に、彼は調査旅行のためにフィジーへ行くとのことで、急遽予定を1日短縮せざるをえなくなった。そのため、キャンベラではあわただしい日程を過ごすこととなった。

#### (1) オーストラリア国立大学

3月22日の午後早く、キャンベラに到着した。旧知のオーストラリア国立大学太平洋研究所人文地理学科のシニア・リサーチ・フェローのピーター・リマー (Peter J. Rimmer) 博士を研究室に訪問し、半年ぶりの会合を喜び合った。中庭を真中にして、特徴のある六角形の建物が三つくっついた大きな H. C. Coombs Building の一角に、彼の研究室はあった。この建物はすでに3回訪れ、若干の研究者と情報交換したことのあるなじみの深いものである。リマー氏とは前年の8月9日に大阪で会い、大阪市役所や中之島図書館での熱心な資料収集の案内役を務めた思い出がある。今回は彼の案内で、筆者が資料収集をさせてもらった。

その一つとして政府刊行物センターへ行き、本やパンフレットを物色した。探していた書物はあいにく見当らなかったが、その代わりに新しい発見をするきっかけをつかむことができた。われわれ研究者が外国書を洋書販売店を通して購入する際、現地での価格と書店への実際の支払い額との差は、いつも誰しも気になるところである。その比較が、帰国後実際に明らかになった。政府刊行物センターでは、Bruce Chapman ed., *Australian Economic Growth*, 1989 の定価が 24.95 オーストラリア・ドルであり、リマー氏の顔による 12.5% 割引で、実際には 21.83 ドルで購入することができた。帰国後、書店を通してすでに注文していた（ことを忘れていた）図書が入荷したが、その値段は 4,429 円であった。リマー氏の割引価格からすると、ほぼ2倍の値段ということになる。円の対オーストラリア・ドルのレート

の時期による差もいく分かの影響はあろうが、研究上の必要コストとはいえ、洋書を何とかもう少し現地価格に近い値段で入手できる方法はないものかと思わせられる。とはいえ現在、リマー氏が教えてくれたニュージーランドのウェリントン大学発行の書物を同大学より直接購入したものの、その支払い方法を模索中であり、この手間の煩雑さと銀行手数料の高さもかなりのものであることを思えば、洋書輸入業者の存在価値もそれだけのことはあると再認識させられてもいる始末である。

## (2) その他

キャンベラほど人工的、人為的で、味気ない都市も少ないのではないかと思うが、同時にまた、何度訪れても変化のない都市でもあるといえよう。町のたたずまいは以前のままであり、見慣れた風景をあとに、空港へタクシーを走らせた。連邦政府で仕事をしている慶応義塾大学の関根政美教授と、出発前の短時間会った。もう1日あれば、同氏を通して多くの政府資料を収集できたのであるが、ティスデル教授との意見交換は重要な要件であるので、断念せざるをえなかったのは残念である。

## IV ブリスベーン市

キャンベラでの予定を1日短縮し、3月23日早朝発の飛行機で、シドニー経由ブリスベーンに来る。グリフィス大学の順子隈本・ヒーリー講師が予約してくれていたロバートソン・ガーデنز(Robertson Gardens)は、グリフィス大学と道路一つへだてたところにあった。そこで旅装を解き、順子氏への挨拶もそこそこに、午後クイーンズランド大学へ向けてタクシーを飛ばした。

### 1 クイーンズランド大学

クイーンズランド大学には、第3の公的目的があった。経済学部長のクレム・ティスデル(Clem A. Tisdell)教授と会い、共同研究プロジェクトについて相談することであった。オーストラリア研究所の有志のメンバーは、これまで1981年と1986年の2回、西オーストラリア大学商経学部のR. T. アップルヤード(Appleyard)教授をリーダーとする若干のメンバーと、「西オーストラリアにおける日豪経済関係の現状分析と将来政策」および「西オーストラリアにおける地域開発と社会経済的ダイナミクスの研究」のテーマで共同研究を実施した経験がある。<sup>1)</sup>今回は「1990年代の日豪経済関係の研究」の新しいテーマで、調査

1) その成果は、遠山嘉博・R. T. アップルヤード編『西オーストラリア経済開発の総合的研究』追手門学院大学オーストラリア研究所、1983年3月、および遠山嘉博・R. T. アップルヤード編『西オーストラリア南西地域開発の研究』追手門学院大学オーストラリア研究所、1988年3月、により公刊されている。

場所をクイーンズランド州に移して新たな共同研究をしようと企図したのである。ただし、その実現の可能性は、一に文部省科学研究費補助金（海外学術調査研究）が得られるかどうかにかかっている。

ティスデル教授とは、彼がまだニューカッスル大学教授であった1977年5月に、筆者とともに研究発表したグリフィス大学ジャパン・コンファレンス<sup>1)</sup>ではじめて会った時以来、じつに13年ぶりの再会であった。彼の研究室で、今回企画した新しいプロジェクトへの協力参加を呼びかけたところ、彼は諸手をあげて賛意を表明し、積極的協力を約束してくれた。

1970年代の資源ブームによる日豪経済関係の急速な拡大と緊密化。しかし、その半面において相次いで発生した鉄鉱石（1972年と1978年）、牛肉（1973年と1976年）、および砂糖（1977年）をめぐる貿易紛争の経験から、1980年代は日豪双方とも熱狂的ブーム後のさめた関係が続いたが、この教訓から学んだオーストラリアは、ツーリズムとハイテクの両産業を1990年代の新しい輸出産業として位置づけている。筆者はこの点をとらえて、クイーンズランド州に着目したのである。同州はオーストラリア諸州の中で日本人観光客の人气が最も高く、ツーリズム・ステートとしてのイメージがすでに定着している。その一方で、ゴールド・コーストをはじめとする各地における日本の不動産会社による土地の買い占めや企業の行動が現地で大きな、主としてマイナスの話題を提供している。これらを中心に、1990年代の新しい日豪経済関係のあり方を、われわれ研究所のメンバーと現地研究スタッフとが共同して有機的、総合的に考究しようというのが、今回のプロジェクトの骨子である。

教授は筆者のこのプランの内容と意義を高く評価し、クイーンズランド大学内の適切な協力者の選定を約束してくれた。ただ当日は、その翌日からの彼のフィジーへの調査旅行のために、それ以上詳細をつめる時間的余裕もなく、夕刻別れを告げざるをえなかった。しかし、筆者の感触では、手ごたえは十分であった。事実その後、彼から協力志願者のリストが続々と寄せられてきている。文部省の審査をパスし、西オーストラリア大学との場合と同様、有益な共同研究が実現することが待たれる今日のごろである。

## 2 グリフィス大学

公的目的の第4番目は、グリフィス大学の本学との学生交換制度の担当責任者と会い、同制度のよりよき発展について意見交換することであった。従来交換学生を送り出してきた現

1) その会議の全容は、筆者の報告を中心に、つぎの論文にまとめられている。遠山嘉博「わが国の日豪経済関係研究機関の現状と問題点——グリフィス大学ジャパン・コンファレンスでの報告を中心に——」『オーストラリア研究紀要』第4号、1978年12月。また、筆者の報告を含む同会議における全報告は、つぎに収録されている。R. D. Walton ed., *Sharpening the Focus, The School of Modern Asian Studies*, Griffith University, 1977.

2) これは、1989年11月30日にオーストラリア研究所が開催した講演会で、講師の豪日交流基金在日事務所長ロス・ウェストコット（Ross Westcott）氏が、「切手が語るオーストラリアの歴史」と題する講演の最後の部分で説明したことである。

代アジア研究学部 (School of Modern Asian Studies) は、現在はアジア・国際研究部門 (Division of Asian and International Studies) の中の1学部、現代アジア研究学部 (School of Modern Asian Studies) に再編成されており、そこの新任の、そして筆者とは13年前からの旧知の順子隈本・ヒーリー (Healey) 講師を訪ねた。そして、これまでの長い間学生交換制度をマネージされてきた加藤英司上級講師は、来たる6月をもって同学科を去り、グリフィス大学の一部である教員大学のゴールド・コースト・ユニバーシティ・カレッジへ転出の予定であること、なお、その後任には隈本・ヒーリー講師が当たられることを知った。本学とグリフィス大学との学生交換制度は1980年 (昭和55年) に始まり、今年でちょうど10周年を迎える。この長期間一貫してお世話下さった加藤上級講師が退かれることは、筆者にとってまことに残念なニュースであったが、しかし、その後任が旧知の隈本・ヒーリー講師であることに安堵感をおぼえた。

筆者はオーストラリア研究所員として、また同所長として、長年にわたり追手門学院大学側で同制度の運営に加わってきたが、この10年間、じつにいろいろの経験があった。当初から、日豪両国の大学生の管理態勢の相違が双方の受け入れ学生の取り扱い方の相違に反映され、両国の留学生を双方で戸惑わせてきた。日本では昭和40年前後の学生紛争の経験から、大学生に対して過度とも思えるきめ細かなケアが常識化しており、その延長線上の感覚で、オーストラリアの学生に対しても特設講義の開設、広島や東京などへの見学旅行の実施と教員や職員の付き添い、ホームステイの学校による斡旋など、まことにきめ細かく面倒をみてきた。しかしこれは、自立心が旺盛で、自律的な自己管理と自己の考えに基づく行動を旨とし、自由を欲するグリフィスの学生には、窮屈な拘束としか感じられないようである。他方、教師の細部にわたるケアに慣れた追手門の学生はグリフィスでは、大学から宿舎をあてがわれる以外は、講義への出席や研究の進め方などすべて自分自身でアレンジし、行動するよう、自律性の名のもとに放任される。これは学生には、何も面倒をみてくれないと映るようである。そのうえさらに追手門の学生については、当初のころは、研究目的意識の希薄さと英会話能力の不足が問題視され、ことに1983年9月に筆者がグリフィスを訪問した際には、当時の責任者のロス・マオア (Ross Mouer) 博士からこの点を厳しく指摘され、ずい分肩身の狭い思いをさせられたこと<sup>1)</sup>であった。その後は改善と発展のための方策として、追手門からの派遣学生には研究テーマの設定、事前研修の実施、会話能力向上の督励等を行っており、またグリフィスからの学生には、留学生の研究テーマに合ったスーパーバイザー制度の付加によって、研究支援態勢を整えている。

加藤氏および隈本・ヒーリー氏と話し合った結果、つぎの諸点が明らかになった。

1) この時の状況は、つぎに詳しい。遠山嘉博「オーストラリア東部を再訪問して」『オーストラリア研究紀要』第9号、1984年3月、とくに182-83ページ。

### (1) 本学派遣学生の英会話能力と研究姿勢

ここ数年の追手門からの派遣学生の英会話能力と研究意欲には大きな進歩がみられ、会話能力の不足による意思疎通の困難や、目的意識の希薄さに起因する指導効果の発揮の妨げが懸念されるような心配は全くないということが、加藤氏から率直に告げられた。この点について長らく頭を悩ませてきた筆者としては、この高評価はことのほか嬉しかった。そして、加藤氏の話しぶりや近年の派遣学生の質の向上を考え合わせる時、これはけっして日本的な外交辞令からのものではないと自負することもできた。

### (2) グリフィス大学からの留学生の受け入れ態勢

留学生の受け入れ態勢の両大学間の相違をどうするかは、最大の論点となった。筆者が本学の受け入れ期間中のプログラムを加藤氏にみせた際の同氏の意見は、もっと自由度を増してはどうかというものであった。特設講義よりも一般の授業への自発的な出席を、旅行も大学のプランによるよりも彼ら自身のプランに基づいた行動を、というものであった。もちろん、留学生がヘルプを求めた時は応じてもらわなければならないが、そうでなければ、彼ら自身に一切を任せてみてはどうか、彼らも自分たちで自発的に何かをやってみたいと考えているであろうから、ということを強調された。特設講義は思い切ってなしにしてはどうか、ただし旅行は、彼ら自身でできない部分もあろうから、これは残してもらっては、ということである。要するに、日本ではお客様扱いとなるが、国情や生活習慣の違いもあるのだからというのが、その理由である。自分で苦勞する方が成長もするであろうし、事実グリフィスでは、追手門の学生に何もしていないと率直に実情を話された。

これはたしかに、一考すべきポイントであろう。ただし本学では、インドからの留学生とのバランスもあることも、忘れずに伝えておいた。また、日本式をオーストラリア式に無理に近づけることだけが国際化ではなく、オーストラリア人に日本式を体験させ、日本理解の一助とさせることも意義なしとはしないと考える。

### (3) マチュアな学生と自由志向

グリフィスからの留学生にはかなり年長の学生が多いことは、本学の場合との大きな相違であると筆者は感じていた。オーストラリアでは、いったん社会に出てから入学するケースが多いようである。そして、「自由が欲しい」との要求は、年長の留学生の方により強いことも明らかとなった。しかし、これは筆者の推測では、マチュアな学生の方が意思表示がより多く、自己主張がより強いことによるものではないかとも思われる。

### (4) グリフィス大学での本学生交換制度の人気

2名ずつ3カ月間の相互派遣についてはどうか。この方式は、(i)学年進行に遅れたくない

ために、夏休みを利用してのこの留学方式は学生間で人気が高いこと、(ii)資金の問題もあり、学生は短期の留学を選好する傾向が強いこと、以上の2点から、本制度は学生間でかなりの人気を博しているという。希望者は多く、選抜の難しさの結果、より勤勉なマチュアな学生の合格する割合が自然に高くなるのであり、意図的にマチュア学生を派遣しているのではないという。これは、従来知らなかった新しい発見である。

#### (5) 追手門以外の相手大学

グリフィスでは追手門との間で短期の学生交換制度を実施しているほかに、1年の長期留学制度を大東文化大学その他との間でも実施しており、さらに他の大学とも交流の輪を広げようとしているという。これは、なるべく多くの大学と交流をもちたいとの希望、また、一つの大学だけであると、どうしてもそこだけに執着するののかとの疑問が提起されること等によるとの説明であった（これは、オーストラリアの他の大学でも聞いたことがある）。多くの大学との交流は、それだけで宣伝効果も生むとの功利的理由もあるという。

#### (6) 語学研修の可能性

語学研修の可能性についてついにながら打診してみたところ、これも十分可能であることがわかった。ことに、加藤氏の転出先である教員大学では、その可能性はより大きいであろうとの展望が示された。

以上のように、両大学間の学生交換制度の改善とよりよき発展の課題が明らかになるとともに、本制度に対する評価や受けとめ方などグリフィス側の事情も明らかとなった。さらに、グリフィス側の担当責任者の交代に際して、追手門側の見解や期待を浸透させることもでき



加藤英司上級講師(左) および順子隈本・ヒーリー講師(中央) とともに

たのである。

グリフィス大学滞在中に、学長（Vice-Chancellor）のロイ・ウェッブ（L. Roy Webb）教授や現代アジア研究学部のカヴィム・リム（David Lim）学部長らに面会する機会もあったが、筆者としては研究上、ブライアン・ヘッド（Brian W. Head）准教授にぜひ会う必要があった。同氏編（当時は上級講師）の *State and Economy in Australia*, 1983 の翻訳を、筆者は学部長時代から手がけてき、すでに3分の2の下訳を終えたにもかかわらず、学部長交代後のこの2年間は手つかずのままとなっていたが、既訳出分の疑問点を同氏に直接質問することが目的であった。同氏は研究室で、筆者の数多くの質問に時間をかけて、懇切丁寧に答えてくれたのは嬉しかったが、思わぬ体験をする結果ともなった。筆者はすでにイギリスの出版物を2冊訳出、出版しているが、その時はいずれも、手紙による質問提起と解答受領であった。今回は口頭で直接質問し、直接解答をえられるのであるから、理解はいっそう明確になるものと期待していた。期待どおりになった場面がもちろん多かったが、またあに図らんや、口頭でまくしたてられると、手紙によるよりもかえって理解困難に陥る場合もあることを実感させられてしまった。とにかく、編著の原書の翻訳は、個々の執筆者の文体の違いから、単著のそれよりも訳業はより難しいことは確かである。

最後に、グリフィス大学の新しい状況に接しての感想を述べておこう。1977年の最初の訪問時と比べてはもちろんのこと、1983年の再訪問以後の同大学の変貌の激しさには、全く驚嘆させられた。それは、その間の大学の急膨張である。キャンパスは非常に広大となり、多くの建物の間で道に迷ったことも再三あった。学生数も急増しており、人口密度の高さを実感した。追手門からの2名の留学生を探し出すのももちろんのこと、連絡をとることさえままならなかった（これは一つには、彼らが自由放任されていることにもよるであろう）。何日も要してやっと会えたという有り様であった。季節的要因もあって雨が多かつ激しく、湿度の高さには全く閉口させられた。裸足の学生は男女とも多くみられ、それはシドニー大学よりもはるかに多かった。

教員や学生がコーヒーを飲む広い喫茶室には、大勢の学生に混じって子連れの男子学生が、赤ん坊を入れたかごを床に置いて談笑している光景に出会わした。その部屋の入り口には学生の伝言板用の壁面があり、いろいろの情報伝達がなされていた。「17ドルで教科書をゆずりたいが、これは6.95ドルの節約ですよ」とか、「下宿の部屋をいっしょに借りたいので、希望者は申し出てほしい」とか、「これこれのスポーツを楽しむ人を求む」とか、その他、物品の売買に関するものが多かった。日本の大学では一寸考えられない学生による伝言板であり、日本では公然とは出ないような内容のものも多かった。こういったところにも、日豪の大学の学生気質の相違が感じられた。

## V ケアンズ市

ブリスベーンには3月24日から30日まで滞在し、用件を片付ける予定であったが、中間の日曜日はblankになる。そこで、3月25日（日）と26日（月）の2日間を利用して、オーストラリアン・ツーリズムのメッカともいうべきケアンズを訪れ、ツーリズムの実態を体験しようとの名目で、ホリデーとすることにした。意識上ケアンズは、ブリスベーンから遠くないつもりであったが、実際には、往路は直行便で1時間50分、帰路はタウンズビル経由のためちょうど3時間の遠路であった。フライト途中の眼下には、グレート・バリア・リーフの紺碧の海が広がっていた。

ケアンズへはホテルの予約なしに行ったが、空港内にホテルと料金が一覧できるマシンがあり、電話ですぐ予約できる仕組みになっており、さすがケアンズと感心した。日本人経営のホテルに泊まる気はなく、また、熱帯の海で泳ぐことを目的の一つとしていたので、ホロウェイ（Holloway）ビーチにあるビーチ・ハット・モテル（Beach Hut Motel）に電話すると、宿泊可という。タクシーで着くと、すぐ先は海岸であった。ところが受付で聞くと、危険なくらげ（jellyfish）がいるから、10月から4月まで、オール・クイーンズランドは遊泳禁止という。しかし、せっかくはるばる来たのだからと、海辺へ出向いた。暑い熱帯の海というのに、泳いでいる人影もなく、寂しい海岸風景であった。それよりも驚いたのは、新婚旅行のメッカといわれるその海が黄色くにどっていたことであった。グレート・バリア・リーフの名からはほど遠く、いささかがっかりさせられた。しかし、気を取り直し、警戒のため沖へ遠出はせずに、とにかく義務感を満たすために泳いだ。1986年の7月末、西オーストラリアのケーブル・ビーチで泳いだ時は、季節の関係もあったろうが恐ろしく冷たかったが、ケアンズの海はなま温かかった。翌1日をケアンズで過す最善の方法をモテルで聞いたところ、アウター・バリア・リーフの孤島へ行くクルーズがいいとすすめられた。料金は94ドルという。

翌早朝、オーシャン・スピリットというツアーの船上の人となった。乗客は50～60人ほどいたであろうが、ほとんどは若いペアかシニアのカップルで、日本人はただ一人。最初は困惑を感じたが、そのうちロンドン大学の社会政策の教授ジョン・スチュアート・マクドナルド（John Stuart MacDonald）氏が話しかけてくれ、同大学の化学の先生という彼の夫人とともに、ツアーを楽しむことができた。沖合のミコマスケイという14種類、28,000羽の鳥がいるといわれる鳥の島までちょうど2時間の船旅の間、豪華客船の雰囲気にはひたり、その沖合で昼食とグラス・ボートを楽しみ、また、小船に乗り換えて鳥の島に上陸し、その浅瀬でスキューバ・ダイビングを楽しんだ。ミコマスケイでのスキューバ・ダイビングもさることながら、筆者が午後客船上に残されてしまった時のその沖合でのスキューバ・ダイビン

グの味は格別であった。深海の海の色の美しさと海中の透明さ、真近かに泳ぐ大小さまざまな熱帯魚の群れ、そしてさまざまな形状のさんご群等は、ケアンズや鳥の島では経験しえぬ貴重な体験であった。

翌3月27日はケアンズ発が午後3時40分であり、午前中市内を散策することも考えたが、モジナ氏がすすめていた克蘭ダ（Kuranda）行きの汽車の旅を経験することにした。駅に着くと、昨日とは打って変わって日本人客がほとんどで、しかも大勢であるのに驚いた。約1時間、谷合いを縫って走る片側のみ客席の汽車で奥地へ進んでいった。延々と続くさとうきび畑は、次第に眼下に遠ざかって行く。はるか下にみえる川は、奥地の開発のため黄色く濁っており、雨期のせいで大量の泥水を流していた。これでは、ケアンズの海のにごるのも当然と納得した。克蘭ダでアボリジニのダンスをみて、すぐさま引き帰した。日本人客はまだ克蘭ダ<sup>1)</sup>にいて、オーストラリア人と2人きりの車中であつた。

## VI おわりに

3月30日午前9時45分、ブリスベーン発の飛行機で帰国の途についた。ところが、航空チケット購入時には知らされていなかった思わぬ事態に遭遇することとなった。ブリスベーンからシンガポール経由で名古屋到着（大阪着は便がとれなかった）とばかり思っていたが、シンガポール直行便ではなく、メルボルン経由であることが機中でわかった。ブリスベーン上空で進行方向が一寸変だと思ったが、機内放送ではじめて知って驚いた。メルボルンでは、機内で1時間半待たされた。シンガポールでは乗り継ぎのため、夜中に5時間10分待たされた。さらに、名古屋直行と思っていたのに福岡経由で、福岡でも機中で1時間20分待たされた。結局、名古屋到着は3月31日の午前10時40分、したがって、ブリスベーンからは実に23時間25分の長旅となってしまった。

短期間のハード・スケジュールであつたが、得たものも多かった。ただ、4月の新学年の多忙の後若干の不調を感じたのは、この強行軍の産物であつたかもしれないと回想している。

1) オーストラリア学生交換制度10周年記念事業の一環として、10月18日に本学で開かれた講演会において、「オーストラリア政府としてはいかなるツーリズム振興対策をとっているか」との筆者の質問に対して、講師の松井朔子シドニー大学準教授は、つぎの3点を指摘された。

- (i) 語学教育、とくに日本語教育の振興。
- (ii) ストライキによる観光客の減少を恐れる政府は、ストライキ一般、とくに航空のストライキに対しては不支持、厳しい姿勢をとっている。
- (iii) テクニカル・カレッジにおいて、ツーリストとくに日本人の接待の教育に力を入れている（サービスの遅れの防止、冷暖房の個々の調節など）。

# Revisiting Eastern Australia

Yoshihiro Tōyama

The writer visited Eastern Australia for two weeks in March, 1990 with many purposes which included going to some universities. The following is complied in the order of the writer's visits.

At the University of Sydney the writer called on Dr S. Matsui, senior lecturer (now associate professor) of the Department of East Asian Studies, Faculty of Arts, and obtained intelligence about English training programme for Japanese students. The writer hopes to use it with his students in the future. The writer went to James Bennett, a book seller, from whom his Center for Australian Studies bought many books, to clear off the balance. The writer went to the University of New South Wales to meet Dr T. Mozina of the Department of Economics to exchange information.

At the Australian National University the writer visited Dr J. Rimmer, Senior Research Fellow of the Department of Human Geography, Research School of Pacific Studies, and was assisted in collecting books and materials for his study.

At Griffith University the writer met Mr E. Kato, Senior Lecturer of the School of Modern Asian Studies, Division of Asian and International Studies, and Mrs J. Kumamoto-Healey, Lecturer of that School, to consult about the improvement and development of the Student Exchange Programme between Otemon Gakuin University and it. Dr B. Head, Associate Professor, Division of Humanities, answered to many questions of the writer's which troubled him during the translation of his book, *State and Economy in Australia* in 1983 into Japanese. At the University of Queensland the writer met Professor C. Tisdell, Dean of the Faculty of Economics, to discuss a joint research programme on the Japan-Australia Economic Relationship in the 1990's by some members of the two universities. He agreed to the writer's plan and promised his cooperation.

The writer went to Cairns to gain a firsthand experience in the Australian tourism which is to be the writer's research subject in the joint research

mentioned above.

It was a short trip but very productive thanks to many Australians' kind help.